

2009/4/30

社会安全政策治安研究会

環境3年

学籍番号 70745220

富永次郎

## 第14章 特別予防と無害化

### 特別予防

犯罪から得た利益・快楽を相殺し、将来的な犯罪を防止するための処罰

### 無害化

犯罪者を物理的に管理し、将来的な犯罪防止よりも拘束による防犯効果を重視。拘禁・電子モニタリングなど

#### I 集合的無害化

罪状が同じものには一律の刑罰を与える

前科・性向は考慮されない

拘禁しなくてはならない人数が増える可能性があり、高コスト

・三振法（アメリカ）

重罪 重罪 終身刑

#### I 選択的無害化

高リスクの犯罪者のみを拘禁する事でコスト削減・効率化をはかる

拘禁施設の収容率が増加している状況では有効ともいえるが、リスクの予測に失敗すると不必要に長い刑期を科す事にもなりうる。

### 拘禁に関する評価

- ・これまでの研究から拘禁が更生に与える影響はほとんど無いと言われている
- ・犯罪者ごとのリスクや更生プログラムの影響を考慮していない研究も多い
- ・近年の厳罰化の流れを考えると効果が低いからと言ってやめる事は難しいといえるのではないか

## 第 15 章 修復的司法

### Ⅰ 応報的司法

加害者への制裁

### Ⅰ 修復的司法

被害者・地域社会の被害回復・加害者の社会復帰および  
当事者同士の相互理解

コミュニティにも紛争解決の一端を担う事が求められる

### 3つの形態

- Ⅰ VOM/VORP(被害者 犯罪者調停)
- Ⅰ ファミリー・グループ・カンファレンス
- Ⅰ サークル・センテンス

### 3つのちがい

	VOM	FGC	CC
参加者	被害者(任意) 加害者 調停者	被害者・加害者 + 双方の支援グループ	FGCのメンバー + 地域住民
その他		主に軽微な 少年犯罪	少年・成人

### 問題点

- ・参加者の満足度は概して高いが、参加が任意である事を考慮する必要がある。
- ・被疑者の権利
- ・FGCに見られるように主に軽犯罪を扱う事が多いが、重大な犯罪に対しては有効なのか。

## 第 16 章 更生

### 評価水準

- ・ 集合評価...再犯率の変化で評価
  - ・ 個人レベルでの評価...態度・生活スキル・コミュニティへの適応度・犯罪の質の変化を評価
- 単に罪種の転換である可能性もある。

更生支持者は個人レベルでの評価を重視する傾向がある。

### 新しい更生プログラム

- ・ 集中監督保護観察

低リスクの犯罪者対象・拘禁施設の収容率緩和やコスト削減に効果があるとされているが規則違反による取り消しも多い。

- ・ ブートキャンプ

成人向けと少年向けがあり、少年向けは教育・セラピーを重視

- ・ マルチシステム療法

青少年の反社会的なつながりを減らし、家族関係の向上等を目的に介入を行う

- ・ 認知的思考技能プログラム

### 評価

明確に有効と言える再犯防止策は見つかっていない

代替的尺度から見れば成果を上げている物もあるが、3次予防の目的である再犯防止という点とはずれがある

非行・犯罪に対する矯正ブートキャンプの効果

[http://fuji.u-shizuoka-ken.ac.jp/~campbell/docj/RIPE/cover/cj/Wilson\\_bootcamps\\_rev.pdf](http://fuji.u-shizuoka-ken.ac.jp/~campbell/docj/RIPE/cover/cj/Wilson_bootcamps_rev.pdf)